

# 試験のフィードフォワード及び フィードバックの為の基礎的考察 ——中国語話者と英語話者のルタ形誤用を通して——

有 川 康 二\*

## 1. 序論

中国語話者にとって、(i) 助詞ハ／ガ、(ii) 動詞の時相制スル／シタ／シテイル／シテイタ、(iii) ムード助動詞ワケダ／ハズダ／トコロダ等の使い分けが困難だと報告されている（寺村1993；331）時相制については黒野（1994）、河先（1994）、猪先（1994）、坂本、町田、中窪（1995）が考察している。これらは習得過程に主点が置かれ、個々の誤用が何故生じたかは説明されず、また学習者の母語別での比較も考察対象ではない。AとBでどちらの習得が早いかという習得順序の問題は Krashen（1982）の自然順序仮説に関わる問題である。しかし、実際のフィードフォワード／フィードバック上必要なのは、その誤用が「何故」生じたのかという誤用の根拠である。誤用を学習者の母語別で比較し、それらの誤用が特定の母語話者のものか検定を行い、教授内容を示唆するという主旨の研究は少ない<sup>1)</sup>。本稿では時相制に焦点を当て、英語話者及び中国語話者の誤用を観察し、両者間の有意差を検定する。学習者の母語と目標言語習得の関係については前者が後者に影響するという「母語干渉仮説」がある<sup>2)</sup>。この仮説は中国語話者及び英語話

---

\* 本学文学部

キーワード：中国語話者、英語話者、時相制、フィードバック、有意差

者でルタ形の誤用の出現頻度とパターンが異なると予測する<sup>3)</sup>。

## 2. 方法

### 2.1. 観察対象

南山大学留学生別科の配置試験で初級レベルと判断された学習者14名の学習1ヶ月目と3ヶ月目の口頭面接と3ヶ月目の筆記試験のデータを使用した<sup>4)</sup>。14名の内分けは母語以外の要因については無作為に抽出した中国語話者7名（男5，女2）と英語話者7名（男5，女2）である。初級レベルとは Mizutani and Mizutani (1974) の18課までを目標とするレベルを指す。

### 2.2. データ収集の方法

データを話し言葉と書き言葉に分ける。話し言葉は口頭面接を2回行った（各5分，テープ録音）。質問は時相制に関する文法的知識を確認できるものを含む<sup>5)</sup>。2回目の口頭面接には筆記試験と同一の質問も含める<sup>6)</sup>。この2回の口頭面接の録音テープを書き起こしルタ形の誤用を抽出した。書き言葉は、3ヶ月目の筆記試験で作文を書かせ（A4用紙20行1枚，時間30分），ルタ形誤用を抽出した。同一学習者の同一の誤用は複数回出現しても1回と計算した。会話の流れという外的要因を排除する為である。

## 3. 結果

### 3.1. 話し言葉におけるルタ形の誤用

ルタ形の誤用合計72個を以下の14のタイプに分類した<sup>7)8)</sup>。

（1）ルタ形誤用のタイプ（話し言葉）

Ets 1=述部省略<sup>9)</sup>：（昨日は何をしましたか。）友達と御飯を\_\_\_\_\_。

Ets 2=言い直し：昨日は大学に行きます，行きました。

Ets 3=疑問詞反復：（昨日は何をしましたか。）大学に行きましたか。

Ets 4=判定詞抜け：日本に来たばかりから，大変でした。

Ets 5=ルタ未分節：（昨日は何をしましたか。）昨日は大学に行きます。

Ets 6=陳述度ずれ：（趣味は？）読みます。それから友達に会います。

Ets 7=\*スル（テイル）：今，アルバイトはしません。

Ets 8=従属節ルタ混乱：日本に来た前に私は大学で教えていました。

Ets 9=\*テイタ（シタ）：昨日は勉強して，お風呂に入っていました。

それから，本を読みました。

Ets10 =\*シナカッタ（シテイナイ）：私はまだ結婚しませんでした。

Ets11 =状態動詞ル形：（タイでは何をしますか。）色々な所にいます。

Ets12 =活用捏造：国に帰ろうっています。

### 3.2. 書き言葉におけるルタ形の誤用タイプ

書き言葉では ET1 から ET4 の誤用タイプは出現せず，ET13 と ET14 は書き言葉でのみ出現する。ET9' は ET9 と逆の現象である<sup>10)</sup>。

#### （2）ルタ形の誤用タイプ（書き言葉）

Etw 5=ルタ未分節：日本人は正月に神社へ行く。前年の嫌な事を忘れた。

Etw 6=陳述度ずれ：一番うれしかったことは私の誕生日だった。

Etw 8=従属節ルタ混乱：中国から来た間にいろいろなことがありました。

Etw 9=\*シテイタ（シタ）：その日は京都に行こうと思った。始めに大学で学割をもらっていた。その後名古屋駅で切符を買った。

Etw9' =\*シタ（シテイタ）：駅でホーストファミリーのお母さんと友達二人と会った。その日は日曜日だったが大勢の人がもう待った。

Etw12 =活用捏造：日本に住んでして嬉しかった事は友人ができた事だ。

Etw13 =関係規定的動詞の活用：工場が豊かな森林地帯を占めるし，お金もかかっている。

Etw14 =ムードずれ：毎日が私には新しい日です。私は毎日を待ちます。

### 3.3. 中国語話者及び英語話者のルタ形誤用タイプの出現頻度とパターン

母語や表現形態の区別をせずにルタ形誤用タイプの出現頻度を示す<sup>11)</sup>。

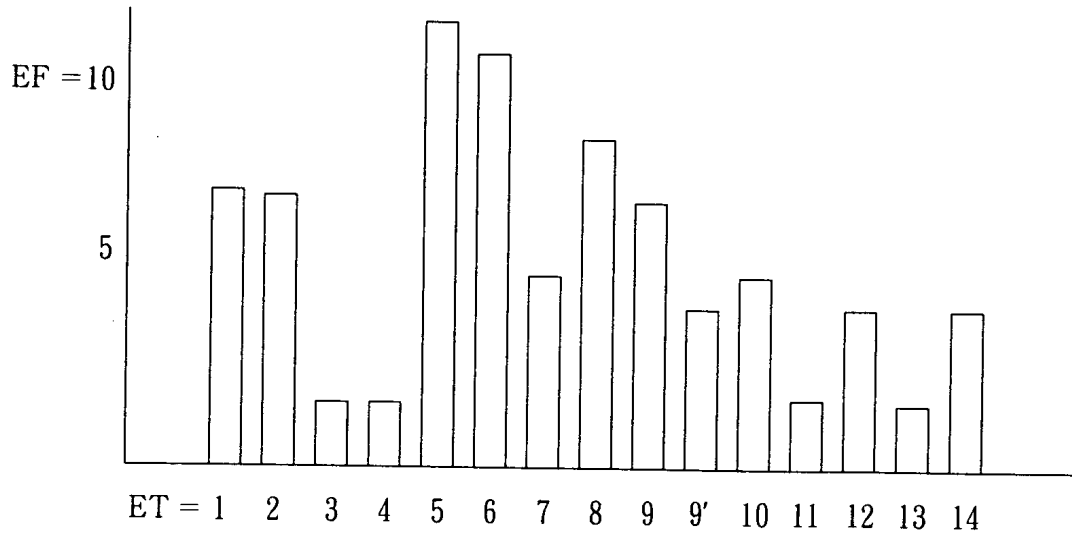


図1 中国語話者及び英語話者のルタ形誤用

図1をみるとET5, ET6, ET8の頻度が高い。次に時相制（テンス／アスペクト）に関連する誤用を中国語話者と英語話者の場合でみる<sup>12)</sup>。

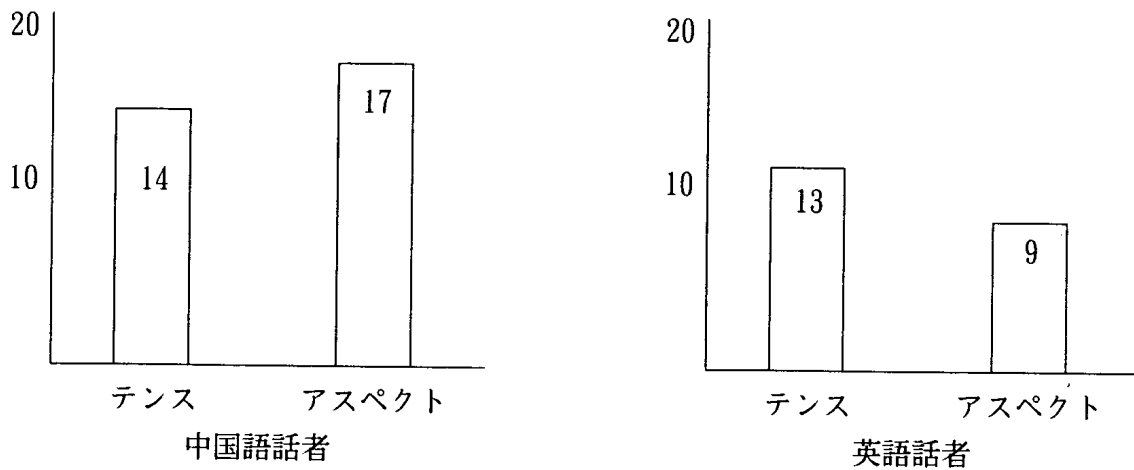


図2 テンス／アスペクト別誤用

中国語話者の方が時相制の誤用が相対的に多く、しかも相の誤用が多発する。次に中国語話者及び英語話者の話し言葉の誤用と頻度をみる<sup>13)14)</sup>。

試験のフィードフォワード及びフィードバックの為の基礎的考察

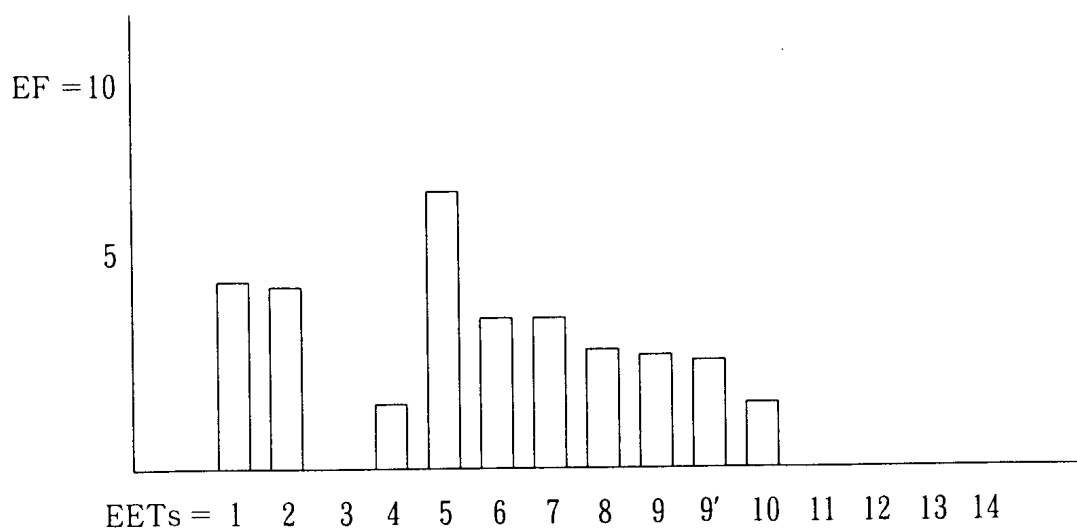


図3 中国語話者の話し言葉におけるルタ形誤用

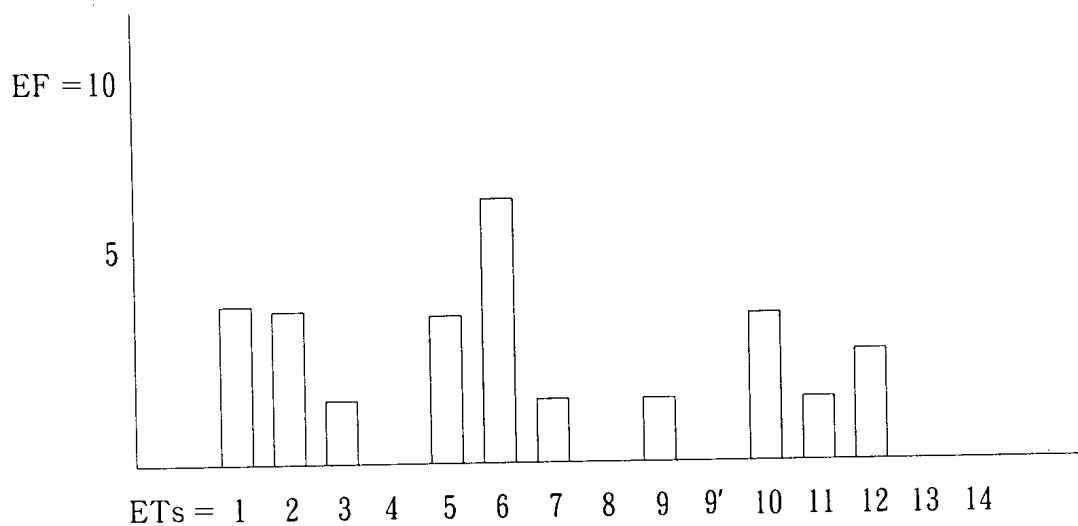


図4 英語話者の話し言葉におけるルタ形誤用

次にテンス／アスペクト別の結果を示す。

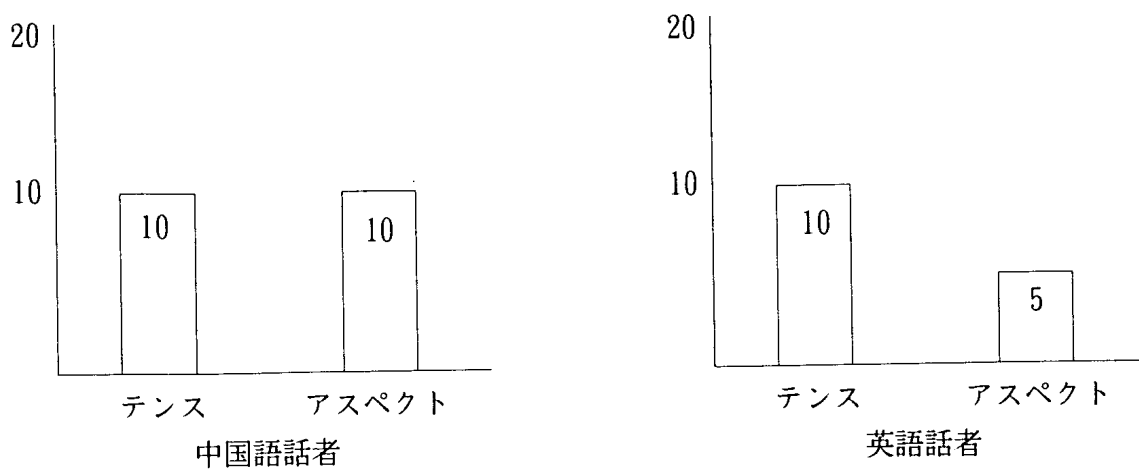


図5 テンス／アスペクト別誤用（話し言葉）

次に、中国語話者の書き言葉の誤用と頻度をグラフ化する<sup>15)</sup>。

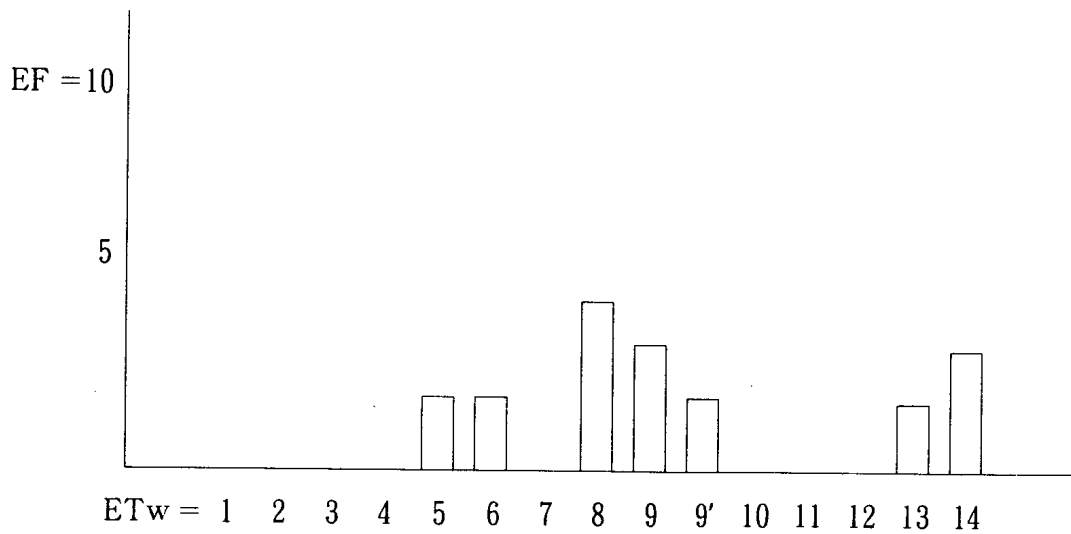


図6 中国語話者の書き言葉におけるルタ形誤用

英語話者の書き言葉における誤用タイプと出現頻度をグラフ化する<sup>16)</sup>。

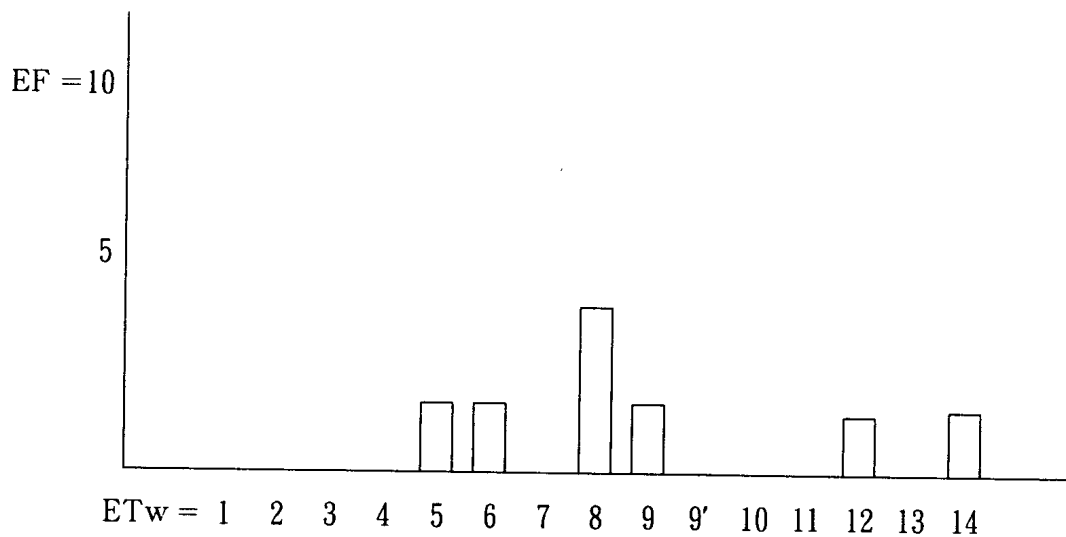


図7 英語話者の書き言葉におけるルタ形誤用

最後に書き言葉におけるテンス／アスペクト別の誤用をみる。

## 試験のフィードフォワード及びフィードバックの為の基礎的考察

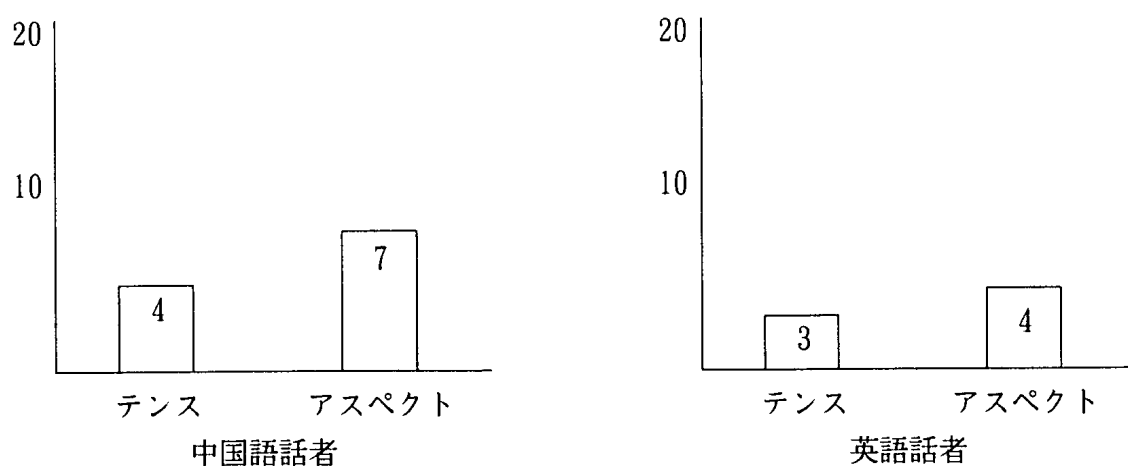


図8 テンス／アスペクト別誤用（書き言葉）

### 3.4. 予備観察

上のグラフを観察することで次のような予備的な観察結果が得られる。

(3)

- 話し言葉と書き言葉では前者のルタ形誤用タイプの出現頻度が高い<sup>17)</sup>。
- 話し言葉特有の誤用は ET1, ET2, ET3, ET4, ET7, ET10, ET11 である。
- 書き言葉特有の誤用は, ET13 及び ET14 である。
- 話し言葉では ET5 や ET6 が多いが, 書き言葉においては ET8 が多い。
- 中国語話者が英語話者より間違い易いのは ET5, ET8, ET9, ET9' である。
- 英語話者が中国語話者より間違い易いのは ET6 と ET10 である。
- テンスとアスペクトの誤用を比較すると, 中国語話者の方にアスペクトの誤用が出やすい。しかし, 書き言葉ではその差は消失する。

### 3.5. 母語干渉仮説の検定

中国語話者と英語話者でルタ形誤用タイプの出現比率に差があるか調べる<sup>18)</sup>。帰無仮説  $H_0$  = 「母集団に差はない」を設定する。分析すると, 5%

の有意水準で有意差があるという結果は出なかった（話し言葉： $U=103$ ,  $n_1, n_2=15$ , ns。書き言葉： $U=100.5$ ,  $n_1, n_2=15$ , ns）。従って  $H_0$  を棄却できない。予測に反して中国語話者と英語話者では話し言葉、書き言葉共に誤用タイプの出現比率には重大な違いはない。更にテンス／アスペクトに限定しても 5 %水準で有意差が存在するとは言えない（テンス（話し言葉）： $U=7.5$ ,  $n_1, n_2=4$ , ns。テンス（書き言葉）： $U=9.5$ ,  $n_1, n_2=4$ , ns。アスペクト（話し言葉）： $U=10$ ,  $n_1, n_2=6$ , ns。アスペクト（書き言葉）： $U=12.5$ ,  $n_1, n_2=6$ , ns)<sup>19)</sup>。

#### 4. 考察

我々は先のグラフから次のような中国語話者と英語話者の「違い」についての予備観察を行った。

- (4) a. 中国語話者の方が間違い易いのは ET5, ET8, ET9, ET9' である。
- b. 英語話者の方が間違い易いのは ET6 と ET10 である。
- c. 中国語話者の方にアスペクトの誤用が出やすい。しかし、書き言葉ではその差は消失する。

ここで仮に 5 %水準での有意差の欠如は標本数の不足から生じたものであると仮定しよう。すると両者の「違い」は何等かの経験的根拠を有することになる。ここでは、英語話者よりも中国語話者の方にルタ未分節、アスペクトの誤用が多発し、しかも話し言葉で両者の差が顕著であるという観察が何等かの経験的根拠を有すると仮定した場合、それらの観察と経験的根拠がどの程度論理的整合性を示すかを論じる。もし我々の予備観察結果と経験的事実が論理的な整合性を示すのであれば、5 %有意差の欠如が標本数の不足から生じたことを逆に証明できるからである。さて、中国語に関しては次のようなことが報告されている。



(5)

- a. 中国語の動詞は語形の変化がなく過去／現在のテンスの表現をとらず、動作／行為がどの段階にあるかを問題にする（紹1995；14）。
- b. 中国語話者の ET9 の根拠は継続性である（寺村1993；333）。
- c. 中国語の「着zhe」は、普通「シテイル」に対応していると言われるが、日本語訳をする際に「シタ」と訳さなければならない場合がある<sup>20)</sup>。
- d. 中国語の「着」はコト的性質が強く文脈に影響されにくいだが、日本語の「テイタ」はムード性が強く文脈に制限されやすい（木村1982）。
- e. 中国語を学習している日本語話者が日本語の「シテイタ」の中国語訳として誤って「着zhe」（動作／行為が進行中であることや状態の持続を表す）を使用することが観察される（正しくは「着」と相互排他的な「了le」を使用しなければならない）（岡部1990；102）<sup>21)</sup>。

(5a) の中国語の自制形態の欠如は、ET5（ルタが意識の中で未だ分節されていないことから生じる誤用）が英語話者より中国語話者の方に多発することと関連する。すなわち、ルタの形態的違いが時間的意味の弁別に関与していない。一方、英語話者の場合、ET5（ルタ未分節）より ET6（陳述度のずれによる誤用）が多発する。これは、英語が中国語と異なり自制に関して制限的であること、また、英語の定／不定が非連続的に区別されるのに対し日本語では定／不定は一致現象とは異質な「陳述度」という連続的な概念を基盤とすることと関連している。さて、(5c) の「着zhe」の日本語における対応物を調べる為に次の日本語例の下線部に意味的に対応する中国語表現を調べた<sup>22)</sup>。

- (6) a. 弟は今隣の部屋で御飯を食べている。(在／正在)  
b. 弟は結婚している。(已經／已)  
c. 窓を開けたまま寝てしまった。(開着)  
d. 学生が向こうからこちらへ歩いてくる。(正在／在)

「着zhe」は「テイル」よりむしろ「シタママ」のような表現に対応する。

(5d) については ET9 (\*シテイタ (シタ)) が中国語話者に多く出現することが次のような誤用例と共に寺村 (1993; 333-334) でも取り上げられている。(\*は許容度が落ちることを示す。)

(7) \* 6 時頃姫路に着いた。その夜、山之上旅館で泊まっていた。翌日の朝早く起きて山に登った。 (寺村1993; 333)

(5b) で述べたように中国語話者は上の下線部「テイタ」を使用した根拠として「泊まるという行為の継続性」を挙げた。寺村によると、上の例を日本語読者が許容しないのは、点的事態の全体的な流れの中に突如出現した線的事態を認識し、その線的事態の範囲内に何事かが起こったと予測するにもかかわらず、3 番目の文を読むと 2 番目の文で設定された時間的範囲内に何事かが起こったという意味が存在しないからである。すなわち、日本語の「シテイタ」では、次に何等かの変化を予測／期待させる表現なのである。従って、次のような例は自然である。

(8) 6 時頃姫路に着いた。その夜、山之上旅館に泊まっていた。すると、夜中に急に地震があり皆飛び起きた。 (寺村1993; 333)

このような話し手が次に起こる事態を相手に予想させるというムード性と進行形の関連については、英語でも類似の現象が観察される。次の推理小説の冒頭部分の進行形の使用は、(8) と同様に点的事態と線的事態の対立、及び、その線的事態の中での事件の発生という変化を表している。

(9) On the last morning of Virginia's bloodiest year since the Civil War, I built a fire and sat facing a window of darkness where at sunrise I knew I would find the sea. I was in my robe in

lamplight, reviewing my office's annual statistics for car crashes, hangings, beatings, shootings, stabbings, when the telephone rudely rang at five-fifteen.

(Partricia Cornwell 1996, Cause of Death, Little, Brown and Company, London. 下線は筆者)

上の例では前半の二つの下線部分が点的事態を表し、次の段階で線的事態を提示し、when 以下の出来事の発生の予想を読者に準備させている。関連する部分のみを (8) と対応するように意識してみる。

- (10) 私は暖炉の火をおこし、椅子に座った。そしてバスローブ姿で犯罪件数統計録に目を通していた。と那時、突然けたたましく電話がなった。

(10) の下線部を「目を通した」とすると許容度が落ちる。(9) の英語の例でも 4 番目の下線部分を and reviewed ... とすると許容度が落ちる。

話し言葉に見られる ET5 (ルタ未分節), ET9 (\*テイタ (シタ)), ET9' (\*シタ (シテイタ)) の誤用は、相対的に英語話者よりも中国語話者の方が多い (図 3 及び 4 を参照)。ET9,9' については、上で観察したような日本語と英語の進行形の使用における類似性が存在するために負の干渉 (誤用) が生じにくいのであろう。ET5 については、英語には中国語と違って現在形と過去形のテンスの形態的区別が存在するという経験的事実と矛盾しない。

一方、中国語の「着zhe」の本来の意味機能は時間の流れの中での変化を前提とした継続ではなく「時間軸上の変化を前提としない状態の純粋な持続をあたかも遠くから眺めて一つの場面として描写すること」である<sup>23)</sup>。従って、「着」は、全体のプロセスの中において変化していく様々な段階の中のひとつの特定場面を表す「シテイル」ではなく、恒常性が基盤のより形容詞的な意味機能を有していると考えられる<sup>24)</sup>。さて、問題の誤用を再提示する。

- (11) \* 6 時頃姫路に着いた。その夜、山之上旅館で泊まっていた。翌日の朝早く起きて山に登った。 (寺村1993; 333)

何故上のような誤用が中国語話者に相対的に多く出現するのか。この中国語話者は確かに「継続」の意味を表したい時は「シテイル」を使用すればよいという独自の規則を形成していると考えられる。同時にその「継続」の意味を中国語の「着」の有する「継続」の意味と同一であると誤解している可能性が高い。「着」の「継続」の意味は「変化を前提としない形容詞的な純粹持続」である。このような純粹持続の意味は変化を前提とする「シテイル」には存在しない。しかし、この中国語話者は「シテイル」に変化を前提としない純粹持続の意味があると誤解していたと予測できる。更に (5e) で述べたように「シテイタ」という日本語表現のように、ある継続が過去に生じ既に完了している場合、「着」は使用不可で完了相を表す「了le」を使用しなくてはならない。つまり、中国語では「着」で表されるような純粹持続は過去や完了とは相いれない要素である。従って、上のような ET9 の誤用の根拠として中国語話者が「継続性」(本人にとっては純粹持続の意味)を挙げたという事実は、例文 (11) で示された一連の事態が過去に生じ既に完了しているという意識が、少なくとも 2 番目の文の継続的事態を中国語話者が産出する時点では存在していないことを示唆する。換言すれば、ET5 (ルタ未分節による誤用) が ET9 (～シタというべきところを～シテイタとする誤用) の土壌を形成していると予測できる。

では次の予備観察結果は如何なる経験的事実に対応するのだろうか。

- (12) 話し言葉では英語話者よりも中国語話者の方にアスペクトの誤用が多発する。しかし、書き言葉では両言語話者間の差は消失する。

書き言葉では話し言葉よりモニター機構がよく働くのであろう<sup>25)</sup>。話し言葉の方が系統発生的にも固体発生的にも獲得が早く、また母語獲得の為の遺伝

的／環境的基盤の影響も強固である（岩田1996；128）。遺伝的／環境的基盤が大きく臨界期以降の学習的な基盤が希薄である話し言葉ではより強力に母語の干渉が生じ、モニター機能が働きにくい<sup>26)</sup>。

## 5. まとめ

本稿で提出したグラフ及び検定数値からの予備的観察に基づく仮説，すなわち，中国語話者と英語話者では時相制に関する誤用のパターンに違いがあるという仮説は，本稿，及び，これまでの諸研究で非統計的に蓄積され報告されてきた経験的事実と矛盾しない。勿論，この経験的事実と矛盾しないということが直ちに5%水準の有意差が英語話者と中国語話者に存在するという結論に結びつくわけではない。しかし，もし予備的観察による現象が経験的事実と矛盾しないということが正しければ，5%水準の有意差があるとは言えないという今回の結果は，標本数の不足によるものであるという可能性も示唆する。十分な標本数を準備した上での再検定が今後の課題である。

## 参 考 文 献

- 市川保子1997『日本語誤用例文小辞典』凡人社，東京  
猪崎保子1994『日本語学習者の作文に見られるヴォイス／アスペクト／ムードの習得—ケーススタディ』『留学生日本語教育センター論集』20，197-215，東京外国語大学  
岩田誠1996『脳とことば—言語の神経機構』共立出版，東京  
岡部謙治1990『この中国語はなぜ誤りか』光生館，東京  
河先俊子1994「誤用分析による韓国人学習者のテンスとアスペクトの習得過程の考察」『平成6年度秋期大会予稿集』76-79，日本語教育学会  
木村英樹1982「テンス／アスペクト—中国語」『講座日本語学11』明治書院，東京  
黒野敦子1994「日本語のテンスとアスペクトの習得—初級学習者の場合」『平成6年度春期大会予稿集』1-6，日本語教育学会  
坂本正，町田延代，中窪高子1995「超上級日本語話者の発話における誤りについて」『Proceedings of the 6th conference on second language research in Japan』66-94，国際大学

- 紹文周1995『はじめての中国語』明日香出版, 東京
- 寺村秀夫1984『日本語のシンタクスと意味II』くろしお出版, 東京
- 寺村秀夫1993『寺村秀夫論文集II—言語学/日本語教育論—』くろしお出版, 東京
- Barnard C.J., Gilbert, F.S. and McGregor, P.K. 1993 *Asking questions in biology*. Longman Group UK Limited. (『生物学の考える技術』近藤修訳, 1995. 講談社)
- Ellis, R. 1987 *Understanding second language acquisition*. Oxford University Press.
- Krashen, S.D. 1982 *Principles and practices in second language acquisition*. Pergamon: New York.
- Mizutani, O. and Mizutani, N. 1974 *An introduction to modern Japanese*. The Japan Times, Tokyo.
- Ommagio, A.C. 1986 *Teaching in context-proficiency-oriented instruction*. Heinle and Heinle Publishers Mass.
- Selinker, L. 1974 "Interlanguage." In J. Schumann and N. Stenson, eds., *New frontiers in second-language learning*. Rowley, Mass.: Newbury House.
- Tarone, E. 1980 "Communicative strategies, foreigner talk, and repair in interlanguage." *Language Learning*. 30. 417-31.
- Vigil, N. and J.W. Oller 1976 "Rule fossilization: a tentative model." *Language Learning*. 26. 281-95.
- Selinker, L. and T. Lamendella. "The role of extrinsic feedback in interlanguage fossilization." *Language Learning* 29: 363-75.

## 注

- 1) フィードバックに関する議論のまとめは, Ommagio (1986; 282-83) 参照。
- 2) Ommagio (1986, 276), Selinker (1974), Tarone (1980) 参照。本稿では種としてのヒトが共有する普遍文法的要素と言語間の差異を決定する媒介変数的要素を区別する考え方をとる。「干渉」は媒介変数設定が異なる時に生じやすいと仮定する。
- 3) 述語の誤用(活用, 相, 時制, ムード, 陳述度)を総称しルタ形誤用と呼ぶ。
- 4) 1995年9月から12月まで週15時間の集中的かつ統一的授業環境が提供された。
- 5) 「昨日は何をしましたか, 明日は何をしますか, 結婚していますか」等。
- 6) 「日本語でいやだったことは何ですか。うれしかったことは何ですか。」

- 7) ET1 は誤用タイプの一番目を一般的に表し, ETs1 は話し言葉で ET1 が出現したもの, ETw1 は書き言葉で ET1 が出現したものを指すことにする。例の中の括弧は質問者の質問を示す。\*シテイタ (シタ) は, シテイタが誤用で, シタが許容例である。誤用部分には下線を施す。
- 8) 市川 (1997) では, 誤用例文を脱落 (要使用の場所での不使用), 付加 (使用付加の場所で使用), 語形成 (活用や接続等の形態的誤り), 混同 (他の関連する項目との混乱), 位置 (配列異常), その他の6種に分類する。この分類でいくと, 本稿の ET1, ET2, ET4, ET5 は「脱落」, ET3, ET8 は「付加」, ET12, ET13 は「語形成」, ET7, ET9, ET10 は「混同」となる。「混同」による誤用は, 「他の項目との混乱による誤用」だが, 問題はその「混乱」が起こるべくして起きたのか偶然そうなったのか, もし, 起こるべくして起きたのなら, その背後にある学習者の論理はどのようなものかということである。
- 9) ET1 と ET4 は直接ルタ誤用と関わらないがルタ誤用顕示化の回避という学習者側のコミュニケーション戦略を含む可能性があるので残した。
- 10) 寺村 (1993; 334) に同様の報告がある。
- 11) E F は誤用出現頻度, E T は誤用タイプを指す。例えば, ET1=7 は誤用タイプ1が7名に出現したことを示す。ET1=7, ET2=7, ET3=1, ET4=1, ET5=12, ET6=11, ET7=4, ET8=8, ET9=6, ET9'=3, ET10=4, ET11=1, ET12=3, ET13=1, ET14=3。
- 12) テンスの誤用=ET5, 6, 11, 14, アスペクトの誤用=ET7, 8, 9, 9', 10, 13。
- 13) 平均頻度 (X=ある誤用タイプを平均何人の学習者が示すか) と標準誤差も示す。ETs1=4, ETs2=4, ETs3=0, ETs4=1, ETs5=7, ETs6=3, ETs7=3, ETs8=2, ETs9=2, ETs9'=2, ETs10=1, ETs11=0, ETs12=0, ETs13=0, ETs14=0。  
 $x = 1.93 \pm 0.52$ 。
- 14) ETs1=3, ETs2=3, ETs3=1, ETs4=0, ETs5=3, ETs6=6, ETs7=1, ETs8=0, ETs9=1, ETs9'=0, ETs10=3, ETs11=1, ETs12=2, ETs13=0, ETs14=0。  
 $x = 1.6 \pm 0.45$ 。
- 15) ETw1=0, ETw2=0, ETw3=0, ETw4=0, ETw5=1, ETw6=1, ETw7=0, ETw8=3, ETw9=2, ETw9'=1, ETw10=0, ETw11=0, ETw12=0, ETw13=1, ETw14=2。  
 $x = 0.73 \pm 0.25$ 。
- 16) ETw1=0, ETw2=0, ETw3=0, ETw4=0, ETw5=1, ETw6=1, ETw7=0, ETw8=3, ETw9=1, ETw9'=0, ETw10=0, ETw11=0, ETw12=1, ETw13=0, ETw14=1。  
 $x = 0.53 \pm 0.22$ 。

- 17) 話し言葉：中国語話者＝ $1.93 \pm 0.52$ ，英語話者＝ $1.6 \pm 0.45$ 。書き言葉：中国語話者＝ $0.73 \pm 0.25$ ，英語話者＝ $0.53 \pm 0.22$ 。）
- 18) 中国語話者と英語話者という2群間の差を問題とし、かつ、カイ2乗検定はいずれかの期待度数が5未満の場合は信頼度が低い（Barnard, Gilbert, McGregor 1995: 邦訳95）ので、マンホイットニーのU検定を使用する。
- 19) 本稿では72個の誤用を対象に検定を行ったが標本数を拡大し再検定する必要がある。しかし微妙ではあるが検定結果から次のことが言える。
- (i) 誤用全体では書き言葉の方に差が強く出る傾向がある。
  - (ii) 時相制に限定すると話し言葉の方に強く差が出る傾向がある。
  - (iii) テンスとアスペクトを比較すると後者に差が強く出る傾向がある。
- (ii) と (iii) の統計的結果は先のグラフによる予備観察結果と一致する。
- 20) 例えば、日本語文 (i) の下線部に対応する中国語表現は「着」を使用する。
- (i) 私は腰を下ろした。すると彼は突然眼を見開き、私を憎らしげに睨みつけた。これは「着」が「テイル」に対応しない場合である。「着」は段階的な進行ではなく、ある状態の純粋な持続（憎々しく脅迫的な顔の形容）、また、ある状態を保持しつつ別の事態が持続する（眼を見開いた状態＋憎らしげな状態＋睨みつけた状態）ことを意味する（仲裕史氏）。すると、「着」に近似しているのは「テイル」ではなく、「戸が開ケタママニナッテイル」「帽子ヲ被ッタ人」等の形容詞的な「タ」であるということになる。
- 21) 日本語文 (i) を日本人が中国語訳すると (ii) の誤用が出る。正しくは (iii)。
- (i) 彼は一週間あまり病気をしていました。
  - (ii) \*他病着一个多星期了。
  - (iii) 他病了一个多星期了。
- (i) は過去のある期間中に病気だったという意味で発話時点では病気は終了している。「着」を使用すると発話時点でも病気が持続していることになる。
- 22) 初級後半を半分程度（IMJ 22課）学習した中国語話者5人に確認した。
- 23) 仲裕史氏（南山大学）の御教示による。
- 24) 変化を前提とするかしないかという違いは日本語自体の中にもある。
- (i) 生きている魚
  - (ii) 生きた魚
- (ii) はより形容詞的である（寺村1984）。また、「テイル」は日常的な空間に突如出現した非日常的事態の描写にも使用されやすい（加藤俊一氏）。例えば、「あんな所に寝ている。」



- 25) Krashen (1982) のモニター理論の5つの仮説の中の一つ。時間的余裕、形態に対する注意力、十分な知識という条件が与えられた場合、無意識的な「獲得」に対して意識的な「学習」が訂正者として働くという仮説。
- 26) 序論の述べた学習困難な項目は機能範疇に関わるもの（格、時相制、陳述度）である。これは先天的／後天的言語障害が機能範疇に関わる要素（一致、時制）に多発するという臨床的事実と関連する（岩田1996、福田、ゴプニック1994）。第二言語学習でも母語獲得の際の言語生成に関わるのと同様の器官的部位が関わると仮定すれば、遺伝的／環境的影響の差が第二言語習得における話し言葉と書き言葉の差に影響すると考えることに矛盾はない。

## **A Preliminary Study on the Feedforward and Feedback of Test**

——Evidence from Errors of Tense and  
Aspect among Chinese and English Speakers——

Koji ARIKAWA

Suppose we have two types of error, A and B. The statistics-oriented theory of language acquisition often talks about the order; which is faster to be acquired? Teachers in classroom, however, need to know why that error, say an error B, actually appeared in the output. This study focuses on the errors of tense and aspect found in the two groups, i.e., the elementary-level students whose native language is Chinese and those whose native language is English. The analysis divulged that there is no significant difference between the two groups at a 5% significant level. We argued, however, based on various empirical evidence, that the difference still exists behind the statistics.